

8月14日 ヘブライ人への手紙 12章3～13節 今日の説教から

説教題：「主に従う道」

今日の聖書箇所では、私たちキリスト者が「義という平和に満ちた実」を結ぶことが出来る、その事実が示されています。この手紙は、「ヘブライ人への手紙」という題名の通りに、パウロと同じようなユダヤ人キリスト者に向けて書かれたものでした。この手紙の中心となっているのは、「神様はあなたたちに救いの手を伸ばしてくれている」ということであり、だからこそ「その手から、自分から離れるようなことがないようにしなさい」という思いが語られています。特に律法の不完全さを指摘しながら、律法そのものを頼るのではなく、律法を完成させるためにこの世に与えられたイエス様を頼ることを勧めています。

ここで少し考えてほしいのですが、そもそもなぜ「律法は不完全だった」のでしょうか。神様から与えられた掟が不完全だなんてことがあり得るのでしょうか。おそらくほとんどのユダヤ人もそう思ったことでしょう。だからこそ、ユダヤ人にとってイエス様を信じることはとても難しい事でした。

どうして律法が不完全であったのか。それは律法自体にではなく、それを受けとめる人間の側に多くの問題がありました。私たち人間の罪深さ、焼き尽くす捧げもの不完全さ、そして祭司という職業の不完全さがこの手紙では指摘されています。それらのすべての要因によって、動物による犠牲では人間の罪を完全に取り除くことは出来ませんでした。

しかし、いまイエス様によって、私たち人間と神様の間の絆は永遠に結ばれることとなりました。イエス様は、十字架と復活により示された永遠の命によって、滅びない大祭司として私たちと神様を結んでくれています。神様の右にいて、いつまでも私たちの祈りを神様に取り次いでくれているのです。そして、十字架で捧げられたイエスさまが滅びない体となったことによって、もはや神様への捧げものが燃えつきることはありません。不完全な動物による捧げものではなく、イエス様という永遠の捧げ物が神様に捧げられているのです。

だからこそ、この手紙の著者は未だに神殿で捧げものの儀式を行っている人々に対して苦言を呈しています。イエス様を信じてキリスト者となったのにユダヤ教の儀式に参加することによって、正しい信仰から離れてしまうことを心配していました。本当に必要なものは、イエス様を主として信じる「信仰」なのです。

今日の個所で示されているように、時に私たちには大きな苦難が降りかかることがあります。この時代を生きる私たちには、今起きているすべての災いが苦難と言っていいでしょう。そのすべてを、「鍛錬として忍耐しなさい」と勧められている、それも、イエスさまへの信仰を深く心に刻みながら忍耐することが求められています。

神様の言葉に従い、イエス様の言葉に従い、聖書に書かれているすべての言葉を「自分に向けて語られている」と自覚をする。その信仰によって、私たちは誘惑を退ける力を受けることが出来ます。多くの先達はその力に支えられて教会を支えてきました。そして、この苦難の先には「それで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせる」と、平和の実現が確かにあることが示されています。その希望があるからこそ、私たちは災いの中にあっても、絶望することなく生きることが出来るのです。

主に従う道は、「平和の道」であります。それは私たち自身が主の平和に包まれて生きることが出来るということであり、そしてそれと同時に私たちが「平和を実現する者」として用いられることでもあります。神様に守られて、神様に用いられている。その喜びを胸に、今週一週間の、この8月の歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヘブライ人への手紙 12章3～13節

- 3:あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい。あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことはありません。
- 5:また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけません。主から懲らしめられても、力を落としてはいけません。なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか。もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。
- 9:更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。